

園芸療法の公開講座の実施形式と学習内容に対する受講生の考えの調査 — 福島学院大学の事例から —

杉浦 広幸

福島学院大学

Investigation of Course Student Thinking for the System and the Contents of Lecture Courses of Horticultural Therapy in Fukushima College

Hiroyuki SUGIURA

Fukushima College

Summary

This study evaluated the interest level of course students in horticultural therapy, with the objective of encouraging more students to join the lecture course in Fukushima College. Questionnaire surveys were used to obtain the opinions of the course students on the four lecture course of horticultural therapy at Fukushima College from May 2006 to June 2007. Out of the participants, 30 respondents joined the course 'for obtaining a horticultural therapist's license', 16 joined due to an 'interest in horticulture', and 14 joined due to an 'interest in horticultural therapy or welfare'. While most students attending college lived in and around Fukushima city, some lived at a considerable distance and traveled by the Shinkansen. In all, 193 students participated in the four-lecture course and 23 abstained. 'Practical horticultural therapy' had the highest number of abstentions. The main reason for abstention was 'difficult schedule', which was shared by 12 students. In addition, the students were mainly interest in welfare and floriculture. These results suggest that it will be easy to recruit students of the lecture course if the experience and career will be useful to welfare and medical institution, however, the programs should be more interest, or they gave up soon in horticultural therapy.

Keywords : college, horticultural therapy, lecture course, course student, objective

大学, 園芸療法, 講座, 受講生, 目的

緒 言

園芸療法ということばが1993年頃から話題になり始め(豊田, 1998), 1994年に米英の園芸療法の専門家たちが来日したのをきっかけに講演会・セミナーなどの開催頻度が増加したとされている(松尾, 2002)。また, 園芸を通して健常者も含めた福祉に関わることを園芸福祉と称する提案がなされ, 園芸療法はその中で療法的に専門化した活動とすべきとの意見もある(松尾, 2002; 2005)。園芸療法もしくは園芸福祉の活動は全国的にみられ, 吉長ら(2002)は東北から九州に至る事例を紹介しており, また福島県においても園芸福祉の実践例としていくつか紹介されている(味川, 2006; 岩崎, 2006; 設楽, 2006; 鈴木勇二, 2006; 鈴木千景, 2006)。そのため, 福島県での園芸療法の学習へのニーズは高いと言

える。しかし, 福島県内には園芸学・農学の学部・学科を有する四年制大学は無く, 園芸福祉・園芸療法を学習する機会が多いとは言えなかった。そのため, 福島県において, 園芸福祉・園芸療法に関する公開講座を開催する意義は大きいであろう。

福島学院大学では, 社会福祉や幼児教育の学生を対象に, 彼らが就職後に活用できる有用な知識と技術を提供することを目的に, 2005年10月より園芸療法に関する公開講座を実施してきた。地域社会への貢献も意図して, 本講座には一般の受講生も, 広く受け入れた。講座は長期間にわたるものであり, 受講により習得した園芸療法に関する知識や技術が受講後の生活や仕事に役立つだけでなく, 学習の成果として相応の証明が得られるならば, 受講の強い動機づけになるものと考えた。そこで本講座では, 受講に必要な単位を取得することで, 全国大学実務教育協会による園芸療法士(全国大学実務教育協会, 2005)が取得できるよう, 講座のプログラムを組んだ。

2008年1月24日 受付. 2009年1月31日 受理.

園芸療法の公開講座を実施するにあたり、より多くの受講希望者が集まる実施形式が望まれる。そのためには、まず受講生の募集対象をどのような地域や施設とすべきかを知る必要があるであろう。さらに、本講座の場合1コマ90分の授業を90コマ実施する必要があるが、1日に実施する時間数や実施日の間隔、そして修了までの期間など受講希望者が受講しやすい実施形式を知る必要があると思われる。また、受講生の興味を引くプログラムについて知ることは、受講希望者のニーズに的確に応えることが可能になり、今後の講座運営に役立つと期待される。

本調査は受講生の受講目的、募集可能な地理的範囲、受講生の傾向、受講生の開講希望日程そして受講生の講座内容の希望を知ることにより、受講生の安定的確保の条件を探るため行った。

方 法

1. 調査対象とした公開講座の詳細

本調査における園芸療法の公開講座の活動は、福島学院大学（福島市内）の園芸療法用庭園（500㎡）および近隣の特別養護老人ホーム（すこやか福祉会特別養護老人ホーム、福島市沖高）の圃場（野菜畑800㎡と中庭200㎡）にて実施した。

調査対象の講座は2005年11月～2007年11月の開講分とした。本講座は、全国大学実務教育協会認定の民間資格である園芸療法士の取得のための必修4科目としたため、その規定（全国大学実務教育協会、2005）に則って実施した。それら4科目は、一般の受講生に親しみやすいよう愛称を付け、1コマ90分の授業を1日に3～5コマ、主に土曜日（1回は日曜）に実施した（第1表）。

受講生の募集活動は、本学生については学生集会での呼びかけとポスター掲示、一般の受講生については大学ホームページと福島市の地域誌への広告により行った。また、2007年10月6日以後の講座は文部科学省による補助対象（社会人の学び直しニーズ対応教育委託事業）となったため、社会人の受講生の受講料と登録料を無料とし（それまで社会人は有料；合計123,000～142,000円、学生は無料）、社会福祉法人の創世会とすこやか福祉会に受講生の派遣をお願いした。

調査は、受講生への選択肢または自由な意見の記述による無記名の質問紙の配布によるか、もしくは直接の聞き取りにより行った。

2. 参加目的（調査1）

本講座の受講生へ参加目的の調査のため、2007年6月9日（園芸論、学生29人および一般4人）と、同年10月27日（園芸療法論、一般14人）で第2表に示した選択肢を設けた質問紙を配布して回答（複数）を求め、重複しないよう合計47人から有効回答を得た。

3. 通学の交通機関（調査2）

本講座の受講生へ通学範囲の調査のため、調査1と同じ講座において、第3表に示した選択肢を設けた質問紙により通学の交通機関について回答を求めた。本調査では、2006年12月23日（園芸療法論、学生1人および一般2人）に聞き取りによる追加調査を実施し、重複しないよう合計50人より有効回答を得た。

4. 受講生の数、職業および受講棄権者の状況（調査3）

本講座の受講放棄者の状況を知るため、2005～2007年に実施された園芸療法の公開講座4科目について、受講生の登録数、職業そして登録後に棄権した受講生の割合を調査した。また、受講の棄権理由について知るため、会う機会に該当者へ第5表に示す選択肢を設けた質問紙を配布するか（学生12人）、または聞き取り（学生4人および一般3人）により、合計19人より有効回答を得た。

5. 開講日程の希望（調査4）

本講座の受講生へ開講の希望日程・時間を調査するため曜日と時間帯、1日の授業時限数、開講の頻度および講座完結までの期間に関し、第6表に示した選択肢を設けた質問紙を配布した。本調査は、2007年10月27日（園芸療法論、一般14人）と、2007年11月3日（園芸療法実習、学生13人および一般5人）に実施し、重複しないよう合計32人より有効回答を得た。

6. 受講生の講座内容への興味（調査5）

本講座の受講生の期待に応じた講座内容とするため、講座内容への興味調査を行った。受講生を調査した講座

Table 1. Explanation of horticultural therapy course in Fukushima College from 2005 to 2007.

第1表. 福島学院大学で2005～2007年に実施された園芸療法講座の説明.

講座の科目名	愛称	授業の実施 コマ数 ²	授業内容
園芸論	園芸の世界へ ³	15	園芸療法で扱う植物、資・機材などの講義
ガーデニング I	ガーデニングを楽しもう	15	園芸療法で行われるガーデニングの演習
園芸療法実習	やってみよう園芸療法	45	高齢者施設や専用庭園での園芸療法の実習
園芸療法論	心と身体をいやす園芸療法	15	園芸療法の手法や事例などの講義

² 1コマ90分（1日3～5コマ実施）。

³ 受2005年の第1回開催時は“ガーデニングといやし”。

は、2007年10月22日（園芸療法論）と、2007年11月17日（園芸療法実習）とし、出席の受講生33人（学生12人および社会人21人）のうち、項目により28～33の有効回答を得た。調査用紙には、各項目に対しA. 強くある（5点）、B. やや強くある（4点）、C. 普通（3点）、D. あまりない（2点）、E. 全くない（1点）の5択とし、点数の平均を求めた。

1) 学習分野

学習分野の興味について知るため、第7表に示した項目に関する興味の程度（A～E）の選択肢を設けた質問紙を配布して調査した。

2) 植物材料

講座で利用する植物材料への興味の程度を知るため、第8表に示した項目に関する興味の程度（A～E）の選択肢を設けた質問紙を配布して調査した。

3) 園芸作業

作業の種類に対する興味の程度を知るため、第9表に示した項目に関する興味の程度（A～E）の選択肢を設けた質問紙を配布して調査した。

結 果

調査1. 参加目的

本講座の受講生における受講目的は“資格取得でキャリアアップしたいため”が回答数30で最も多く、回答者数の63.8%であった（第2表）。次に“園芸に興味があったため”が回答数16、“園芸療法に興味があったため”が回答数14で、いずれも前記の回答の半分程度であった。“職場の指示・推薦”が回答数9で、この意見は社会人が多く受講した2007年10月27日の調査でみられた。“友人に誘われたから”が回答数3で、その他の回答は無かった。

調査2. 通学の交通機関

本講座の参加者の交通手段は、マイカーが最も多く22名で、次に電車・バスが11人、自転車は8人そして徒歩は7人であった（第3表）。また、新幹線による通学も2人おり、聞き取り調査の結果隣県からの一般受講生であった。

Table 4. Number of course students, abstainers and occupations of the course students.

第4表. 受講生の数、棄権者および受講生の職業。

講座名	登録受講生数 (社会人数) (人)	受講棄権者数 (人)	受講棄権者の 割合 (%)	受講生の職業と人数 ² (人)
園芸論	46 (7)	3	6.5	大学生39, 看護師3, 大学教員2, その他2 ²
ガーデニングI	46 (3)	5	10.9	大学生41, 看護師3, その他2 ²
園芸療法実習	41 (5)	8	19.5	大学生36, 看護師3, その他2 ²
園芸療法論	55 (27)	11	20.0	大学生33, 介護福祉士19, 看護師3, その他5 ²

²人数1の職種：社会福祉士、自営業、会社員、訪問ヘルパー（2級）。

受講生の延べ人数195人、棄権者の延べ人数28人、棄権者の割合は全体で14.4%。各講座2回分の合計。

調査3. 受講生の数、職業および受講棄権者の状況

受講生数は講座により、2回の合計で41～55人であった（第4表）。本学の学生を除く一般の受講生の職業は、介護福祉士が最も多く、次に看護師であり、自営業や会社員など、医療や福祉以外の職種もみられた。

また、4科目の受講の棄権者は延べ28人で、受講者全体の14.4%であった。中でも園芸療法論で20.0%、園芸療法実習で19.5%と高かった。受講棄権理由は“スケジュールの都合”が回答数9で最も多く、次に“興味の喪失”が回答数5であった（第5表）。また、受講棄権の理由の回答を避ける受講棄権者も多く、9人から回答が得られなかった。

調査4. 開講日程の希望

開講の曜日の希望については、土曜の日中が回答数20で最も多く、次に平日の夜間であった（第6表A）。日曜日は希望が少なく、その日中が回答数2あるのみで

Table 2. The reasons behind opting for the lecture course on horticultural therapy at Fukushima College (Multiple answers).

第2表. 福島学院大学での園芸療法講座受講生における受講理由。

受講理由	回答数
資格取得でキャリアアップしたいため	30
園芸療法に興味があったため	16
園芸に興味があったため	14
職場や学校の勧め・指示	9
友人に誘われたため	3
その他	0

回答者数47人（学生19人、一般18人）。

Table 3. Methods of commuting to college.

第3表. 受講生の通学方法。

通学方法	回答数
マイカー（送迎を含む）	22
電車・バス	11
自転車	8
徒歩	7
新幹線	2
その他	0

回答者数50人（学生20人、社会人20人）。

あった。

1日に実施する90分の授業の時限数の希望は、4限が回答数18で最も多く、次に3限であった(第6表B)。

開講日の頻度の希望は、1か月に2回が回答数14で最も多く、次に1か月に3回であった(第6表C)。

4科目の講座完結までの期間の希望は、6か月と1年がいずれも回答数6で最も多く、次に3か月であった(第6表D)。

調査5. 受講生の講座内容への興味

1) 学習分野

講座で学習する分野の興味について調査したところ、福祉の分野が4.3で最も高く、次に医療の分野で4.2であった(第7表)。一方最も低かったのは、農業的分野の3.5で、福祉の分野と有意な差があった。

2) 植物材料

講座で利用する植物材料の興味について調査したところ、花が4.4で最も高く、次に野菜で4.2であった(第8表)。一方最も低かったのは、盆栽の2.7で、その他の植物の分野全てと有意な差があった。また、庭木、穀類(工芸作物を含む)および山野草も低く、花と有意な差があった。

3) 園芸作業

講座で体験する園芸作業への興味について調査したところ、栽培が4.0で最も高く、次に農産物の加工とクラフト作り(植物を素材)の3.8であった(第9表)。一方最も低かったのは農業(園芸)機械の2.8で、前記の3

Table 5. The reasons behind abstaining from the lecture course.

第5表. 受講棄権の理由.

棄権理由	回答数
スケジュールの都合	9
興味喪失	5
体調不良	3
その他	2
不明 ²	9

²調査用紙の未送付者を含む。

回答者数19人(学生16人, 一般3人)。

Table 6. The number of requests for a one-year plan with regards to the school days and hours (Multiple answers).

第6表. 開講日程についての希望.

A. 曜日と時間帯			B. 1日の授業コマ数 ¹		C. 開講の頻度		D. 完結までの期間	
曜日	時間帯	回答数	授業数	回答数	授業数	回答数	期間	回答数
土曜	日中	23	4限	19	1か月に2回	15	1年	10
平日	夜間	6	3限	6	1か月に3回	6	6か月	10
平日	日中	4	2限	5	毎週1回	5	3か月	4
日曜	日中	2	5限	2	1か月に4回	4	9か月	2
土曜	夜間	1	1限	1	1か月に1回	3	2年	2
その他 ²		3	その他 ²	2	その他 ²	0	その他 ²	4

²無回答を含む。
回答者数33人。

²無回答を含む。
回答者数31人。

²無回答を含む。
回答者数29人。

²無回答を含む。
回答者数28人。

分野の作業と有意な差があった。

考 察

本園芸療法講座の受講理由について最も多かったのは“認定資格取得でキャリアアップしたかったから”であった。受講生は、民間資格であっても園芸療法士が得られれば、職場での地位向上や就職活動に有利になると考えたのであろう。しかし、わが国において園芸療法士

Table 7. The number of requests for the course syllabus.

第7表. 学習内容についての希望.

学 習 内 容	希望の程度 ²
福祉の分野	4.3b ¹
医療の分野	4.2b
自身の癒し	3.9ab
ガーデニング	3.8ab
農業的分野	3.5a

²多く, 5点; やや多く, 4点; 普通, 3点; やや少なく, 2点; 少なく, 1点。

¹異なるアルファベット間には5%レベル(Tukey法)での有意差あり。

回答者数33人。

Table 8. The level of interest in plant materials.

第8表. 植物材料についての興味.

植物の分野	興味の程度 ²
花	4.4c
野菜	4.2bc
ハーブ	4.1bc
果樹	3.8bc
観葉植物	3.8bc
庭木	3.6b
穀類	3.3b
山野草	3.2b
盆栽	2.7a

²強く, 5点; やや強く, 4点; 普通, 3点; あまりない, 2点; 全く無い, 1点。

¹異なるアルファベット間には5%レベル(Tukey法)での有意差あり。

回答者数33人。

Table 9. The level of interest in horticultural work.
第9表. 園芸作業についての興味.

作業の種類	興味の程度 ²
栽培	4.0c ^y
農作物の加工	3.8bc
クラフト作り	3.8bc
土作り	3.3abc
庭園設計	3.3abc
園芸作業具	3.2ab
エクステリア	3.0ab
栽培施設	3.0ab
農業機械	2.8a

²強く、5点；やや強く、4点；普通、3点；あまりない、2点；全く無い、1点。

^y異なるアルファベット間には5%レベル (Tukey法) での有意差あり。
回答者数33人。

は、まだ社会的な認知が十分得られているとは言えないのではないだろうか。

園芸療法士は、アメリカやイギリスでは国家資格に準ずるような資格とされている (山根, 2002)。わが国では、2002年に全国大学・短期大学実務教育協会 (現全国大学実務教育協会) による園芸療法士の称号認定制度が発足し、同年に兵庫県認定の園芸療法士の制度が発足した (松尾, 2005)。そのほか人間・植物関係学会 (人間・植物関係学会, 2005) や、日本園芸療法士協会 (日本園芸療法士協会, 2005) でも園芸療法士の認定を行っている。しかし、その認定制度には知的・技術的なレベルに相当のばらつきが認められるとし、園芸療法士に対する社会的評価の低下や、園芸療法士に対する待遇上の不利益を心配する意見がある (松尾, 2002; 2005)。人間・植物関係学会による園芸療法士資格認定制度は、その国家資格化のための関係機関一本化のきっかけであるとの意見がある (松尾, 2005)。そのため、今後関係の団体同士で社会的評価向上のための協議が必要であろう。今後の関係機関の動向に期待したい。

また、本講座の受講理由として“園芸に興味があったから”や“園芸療法に興味があったから”も多かった。一方、受講棄権理由を調査すると“スケジュールの都合”が最も多く、続いて“興味喪失”であった。本学が実施していた園芸療法の公開講座は長期間行われるので、単に資格が欲しいというだけでは続かず、受講生の園芸療法や園芸への興味も重要であろう。さらに“職場の指示・推薦”もみられた。この意見は、高齢者福祉施設へ受講生の派遣をお願いした講座での調査で得られた結果であった。施設に受講生の動員をお願いしたところ、多くの一般受講生があった一方、棄権者も多かった。それら社会人の受講棄権の理由を聞き取ることはできなかったが、高齢者施設の側が職員に動員をかける際、個々の職員と十分協議せずに受講登録したためかもしれない。また、本講座が文部科学省の補助対象になっ

たことから、受講が無料のため高齢者福祉団体へ安易に派遣を依頼したことも問題があったかもしれない。そのため、園芸や園芸療法への興味があまり無い状態で職場から受講登録者としてあげられ、学習意欲が低かったので棄権したと推察された。働きながら休日に公開講座へ出席することは、大きな負担であり、棄権者が多く出るとは講座の運営上好ましくない。そのため、本公開講座のような長期に渡る園芸療法の公開講座の受講生の募集は、園芸や園芸療法に興味を持った学習意欲の高い受講希望者に絞るのも方法かもしれない。しかし、園芸療法の対象が必ずしも園芸への意欲が高い人とは限らないことを考えると、受講生の学習意欲を高めることも学習のテーマと言え、より興味を引くプログラムを研究するなど受講生の学習意欲を高める工夫も重要であろう。

本学生の受講生は、福島市内やその周辺から通学していた。しかし、学外からの受講生の中には、新幹線による隣県から通学者が2名いた。本講座は、毎週土曜の開講であるため、新幹線などの高速交通機関があれば、遠距離でも通学は可能と思われる。そのため、一般の受講生の募集活動は、遠距離でも新幹線通学など高速交通機関があれば日帰り通学が可能範囲まで行るのが妥当であろう。

開講日程の希望について調査したところ、土曜日の日中に4限程度を実施し、1か月に2回程度で4科目を6か月～1年かけて完結して欲しいという希望が多かった。受講生には社会人と学生がおり、いずれも平日の日中に勤務していたり、授業を受けたりする必要がある。週末の土日連続や、1日に5限以上の実施そして毎週末の開講では、受講生も大変と思われるので妥当な結果であろう。

学習分野の希望について調査したところ、福祉の分野と医療の分野を多くして欲しいという意見が多かった。受講生には、福祉学部福祉心理学科の学生が多く、それらの学生は福祉施設や病院での勤務希望者が多いと推察される。また、一般からの受講生は、介護福祉士、看護師および社会福祉士が多く、学習分野の希望としては当然の結果であろう。

受講生における植物の趣向は花と野菜、作業の趣向は栽培、農産物の加工そしてクラフト作りであった。そのため実習については、栽培した花や野菜をクラフト作りや調理に用いるプログラムを組むと、受講生の興味をより引きつけるであろう。

以上より、園芸療法の公開講座について受講生は、週末の開講で福祉・医療への植物の活用について学べ、受講後は資格が得られることを望んでいた。そして、受講生の募集は日帰り可能範囲にある福祉・医療の施設で実施すると集まりやすいが、棄権者を減らすためには学習意欲を高めるようさらなるプログラムの工夫が必要であると思われた。

摘 要

本研究は、園芸療法の公開講座の受講生確保のため、彼らの講座への考え方について調査した。福島学院大学において2006年5月～2007年6月に実施された園芸療法に関する4科目の講座において、受講生に質問紙を配布または聞き取りにより調査した。本講座受講生の受講目的は“資格取得によりキャリアアップしたいため”が回答数30の最多で“園芸に興味があった”が回答数16、“園芸療法に興味があった”が回答数14であった。多くの受講生は福島市周辺からの通学であったが、新幹線による遠距離通学者もいた。本講座の受講生延べ193人中23人の棄権者があり、理由は“スケジュールの都合”との回答が12名で最も多かった。受講生は学習内容は福祉、植物の分野について花、作業として栽培を好む傾向がみられた。園芸療法の公開講座の受講生は、福祉・医療分野に経験や経歴が役立つ内容とすればそれらの施設で募集することで確保できるであろうが、学習意欲を高めるよう工夫しなければ受講は続かないであろう。

引用文献

- 味川春子. 2006. 心の開放と癒しを求めて. pp.10-12. 日本園芸福祉普及協会(編著). 園芸福祉 実践の現場から. 創森社. 東京.
- 岩崎キヨ子. 2006. 地域住民のよりどころにガーデニングによる園芸福祉. pp.10-12. 日本園芸福祉普及協会(編著). 園芸福祉実践の現場から. 創森社. 東京.
- 松尾英輔. 1998. 園芸療法を探る. 第4章 日本における園芸の療法的活用と園芸療法. pp.153-205. グリーン情報. 名古屋.
- 松尾英輔. 2002. 日本にも園芸療法の専門家養成教育と資格認定制度が発足-それらの認定基準-. 農業お

- よび園芸 77(10):1049-1053.
- 松尾英輔. 2005. 社会園芸学のすすめ. 第3章 心身の健康と豊かさの実現. pp.139-202. 農山漁村文化協会. 東京.
- 日本園芸療法士協会. 2005. 園芸療法士称号取得講座ご案内. 内閣認証NPO法人 日本園芸療法士協会. <http://www.engeiryohoshi.or.jp/52/index.html>.
- 人間・植物関係学会. 2005. 人間・植物関係学会認定「園芸療法士資格認定制度」について. 人間・植物関係学会雑誌4:39-41.
- 設楽 力. 2006. すばらしいチームワークを育むジュニアサッカークラブの園芸活動. pp.10-12. 日本園芸福祉普及協会(編著). 園芸福祉実践の現場から. 創森社. 東京.
- 鈴木勇治. 2006. 「古今和歌集」にも記された花「ハナカツミ」による地域づくり. pp.10-12. 日本園芸福祉普及協会(編著). 園芸福祉実践の現場から. 創森社. 東京.
- 鈴木千景. 2006. 世代間交流にも一役子ども達と楽しむトウモロコシ栽培. pp.10-12. 日本園芸福祉普及協会(編著). 園芸福祉実践の現場から. 創森社. 東京.
- 豊田正博. 1998. はじめてみよう園芸療法. 第1章 園芸療法ってどんなこと. pp.18-52. 家の光協会. 東京.
- 山根 寛. 2003. 園芸リハビリテーション. 8-3 いろいろな園芸活動. pp.57-58. 医歯薬出版. 東京.
- 吉長元孝・塩谷哲夫・近藤龍良. 1998. 園芸療法のすすめ. 第5章 日本における園芸療法のケーススタディ. pp.160-262. 創森社. 東京.
- 全国大学実務教育協会. 2005. 平成17年会則・称号認定関係規定集. pp.76-81. 全国大学実務教育協会. 東京.